

# 横浜詩人会通信

1958年創立

2016.7.7

No.299

横浜詩人会事務局 横浜市西区境之谷 30-19 油本方 TEL045-516-3182  
 発行人 中上哲夫(会長) 東京都町田市金森東 4-35-17 \*郵便振替 00230-0-5574 ヨコハマジンカイ

## 鮎川信夫と「荒地」展のこと

平林敏彦

また引越かと言われつつ、私は事情があつて昨年暮れに横浜から静岡へ転居したが、半年ぶりに五月二十八日から神奈川近代文学館で始まった『没後30年、鮎川信夫と「荒地」展』(七月十八日まで)を見学しに行った。詩書の収蔵では全国一と言われる公立の文学館が戦後現代詩の象徴と目される詩人紹介と、彼を中心にしたグループ「荒地」の業績を展示する初の企画展と言うのだから、敗戦直後の第二次「荒地」といくらか縁があつた私の血がさわぐのは当然のこと。それも横浜でと聞いている「荒地」に関心がある横浜詩人会の仲間たちとも会えるのではない。私が会場に到着したのは開催初日の昼過ぎだったが、予想通り十人ほどの熱心な顔ぶれが集っていた。

展示の中心になるのはなんと、言つても生原稿で、鮎川が戦地から負傷して帰還後、福井県下の傷病軍人療養所で入手した巻紙5本に書き綴つた「戦中手記」だ。敗戦直前、毎夜消灯後に看守の目を盗んで自らの戦争体験と、危機の時代に対峙する思想を命がけて手記にした鮎川の強靱な精神に圧倒される。ほかに戦後鮎川が理論的支柱になって現代詩の革命を果たした「荒地」の三好豊一郎、黒田三郎、中桐雅夫らへの書簡。鮎川の戦中詩篇「ガラスは一個のいぼで：」の生原稿。あるいは一九五〇年代に仲間うちで創立した荒地出版社で撮つた鮎川と、後年彼と結婚した英米語学者最所フミのめずらしいペア写真。田村隆一の第一詩集『四千の日と夜』(一九五六)出版記念会における田村と鮎川、吉本隆明のスタンプ。当日の出席者が墨書した芳名簿。ほかにも北村太郎の自伝的エッセイ『センチメンタルジャーニー』の肉筆原稿など、大規模展示とは言えないが、遠去かつてゆく戦後詩の灯を懐しむ者には見逃せない展示

になつてゐる。  
 さて、「荒地」と私はどう関わつたか。先刻承知のむきも多と思うが、鮎川が森川義信ら早大の同期生と第一次「荒地」を創刊してから二年後の一九四一年、大東亜戦争勃発直前に中学生(Y校)だった私は、希代の天才と憧れていた田村隆一に会いたくて東京・大塚の宿をアポなしで訪問した。いまだに夢を見てるようだが、田村は聞きしに勝るハンサムで才気煥発。彼の話はほとんど理解できなかつたが、これが詩人だと私はすっかり仰天していた。それが縁で敗戦後、私が創刊した薄っぺらな同人誌「新詩派」を助けてやろうと、田村は義侠心から鮎川と三好にも声をかけてくれて、まだ彼らの詩誌「荒地」が出る以前の一九四六年に発行された三冊の貧相な「新詩派」に、田村たち三人のエッセイと詩篇が載つている。だが鮎川はすでに没後三〇年、三好と田村も点鬼簿の彼方で、グズな私はどうすればいいのかね？

現代詩セミナー2016・荻野アンナ氏講演  
「日常から詩をつかむ」 報告—方喰あい子



講演中の荻野アンナ氏

六月十一日(土)午後一時半より、野毛シャールで、今年度の現代詩セミナーが開催されました。中上哲夫会長の挨拶、「荻野さんは駄洒落好きとして知られ、芥川賞の受賞を知らせる電話にも『あ、しよう』と応えられた。」というエピソードを交えた講師紹介で始まり、油本達夫理事長の司会で進行しました。講演は、「金原亭駒ん奈でございませう。」で幕開けとなりました。元々、荻野さんは詩人になりたかったそうで、高校生のとき、



あいさつをする中上会長

萩原朔太郎に嵌まり、朔太郎好きの友人と、朔太郎の詩の暗唱をしあつたそうです。／竹 竹が生えた／などと。お陰で電話代が高んだそうです。ユリイカに投稿したことがあり、全部ボツになって、当時の編集長、鈴木志郎康は忘れないそうです。大学に入ってから、自分は散文的な人間と分かり、小説に行き着き、ふざけた小説など書き始めたそうです。一方、落語を始めて、師匠の勧めで俳句の会に出られたそうですが、向いてなかつたようで、唯一詠んだ俳

句を披露された。／柏餅味噌餡瀝し餡つぶし餡／詩は懂れていまして、生まれ変わったら詩人になりたい、と話されました。

昨年十一月にパリで起きた、同時多発テロ事件の二週間後位に、現地に行く機会があり、自由時間に、テロのあつた現場を歩かれたそうです。その折、撮影した写真を見せながら、紹介してくださいました。

アメリカのロックバンドのコンサートの中にテロがあつた「バタ克蘭劇場」の現場には、山のような花が手向けられ、メッセージも多く、歩道にはみ出すように、捧げ物が置かれていました。「恐れるのはよそう」、恐れないうで日常に暮らそうというメッセージが多かつた。ピンクのウサちゃんの手書きの涙を流して、「喪の黒に染まるのはよそう。しかし忘れるのはよそう」。あえてピンクのウサギにして、真つ暗になるのをやめて、ただし忘れることもしない、と

いう決意表明でありました。「私は一足ごとに平和と愛を大地に贈る(捧げる)」、また、「我々の自由はあなた方の武器よりももつと強いのだ」等。長いこと忘れずにいようという思いが込められていました。

「教会」に入ると、記帳するノートがあり、その中に、「我々は食べて飲んで普通に暮らす 恐れることはしない」と書かれていたのが印象に残りました。

「カンボジアレストラン」は、シャツターが下りて花が置いてありました。紙に子供(小学生)が絵を描いて、その下に詩が四行並んで、ポール・エリュアールという詩人の名前が書かれていました。この紙がいくつも連なつていて、色々な絵とエリュアールの詩の一部が書かれていました。十字架・花・蠟燭がたくさん置かれて、色々な国からのメッセージが貼られていました。ポルトガルの人からのメッセージ、「自由と平和と愛を輝かせる灯台であろう 我々



司会の油本理事長

の心を恐怖と闇と憎悪の中で心を閉じてしまわないように」。テロリズムに対して、「反義語は何だろうと思ったとき、「自由」「啓蒙」「文化」という言葉が当てはまるのだなと感じました。千羽鶴が置かれて、日本の人も千羽鶴を折って、現場に持ってきたのだなと感慨深く思いました。

「共和国広場」は大規模に花が置かれて、エッフェル塔の作り物から、かなり派手な状態なっていました。

このような情景を目で見て、写真に納めて、荻野さんはポー・エリユアールに行き着かれたそうです。「自由」という詩篇について話されました。

「自由」

ポール・エリユアール  
安藤元雄訳

学校のノートの上  
勉強机や木立の上  
砂の上 雪の上に  
君の名を書く

読んだページの上  
まだ白いページ全部の上に  
石 血 紙 または灰に  
君の名を書く

(以下八連を略し、十二連目)

いまともるランプの上  
いま消えるランプの上  
一つに集まった僕の家の上に  
君の名を書く



質問をする荻悦子さん

\*君は自由のこと。詩篇の一部を掲載しました。

最後に、テロリズムの後にパリを歩いてその歩いた街かどで花と蠟燭と街って自由、というたくさんの言葉に出会い、更にエリユアールについて、時代性だけで終わらない、不変的な自由を感じました。詩人ではない人間が詩を懂れつつ、こういう街歩きをしながら、街角から詩のかげらを拾ってきました、と締めくくられました。

質疑応答、「小説を書くきっかけ」「西脇順三郎との接点」に答えられました。

荻野さんは八月第三土曜日に、野毛にぎわい座に出演予定。

どうぞお出かけください。

荻野アンナさん、ありがとうございます。ありがとうございました。ご参加いただきました皆様方、ありがとうございます。

(撮影・光富郁埜・小桜ゆみ)

【参加者】(敬称略)

油本達夫 油本正枝 荒波剛  
植木肖太郎 大石規子 荻悦子  
小沢千恵 大鹿理恵 方喰あい子  
川端進 木島章 小桜ゆみこ  
小島昭男 小林妙子 坂多瑩子  
佐相憲一 鈴木正枝 中上哲夫  
中村敏彦 日野零 福井すみ代  
朴貞花 保高一夫 光富郁埜  
村山精一 森口祥子 山田玲子



会場風景

## ホースネック幻影

石原武

私の横浜も古くなって霧にかすんだ印画紙のようだ。忘れもしない、関内の駅から運河に出ると岸辺に「ホースネック」というバーがあった。淋しい夕暮れ、あそこに行く誰かに会えた。近藤東さんが水割りのグラスの水を鳴らしていたり、扇谷義男さんの辛辣な批評が待ち構えていた。髭の主、イサオさんが給仕する「にら豆腐」は美味かった。誌友寛慎二の尻尾に掴まらなくても、やがて私はこの横浜のアジトへ足しげく通うようになった。

梅雨に濁る運河の夕暮れ／この辺にホースネックというバーがあったカウンターでスコッチの水を鳴らしていた／「新領土」の詩人あの窓から「レーニンの月夜」が見えた／戦争や西瓜の種やコミユニスト

それに売れない詩人が月夜の運河に漂った（「六月の蠅」部分）。一九六八年、第一回横浜詩人

賞を、はからずも私の詩集『軍港』が受けた。思いがけないことだった。近藤東さんから賞状を受け、選考委員長の山田今次さんの講評を固くなって聴いた。授賞式のと、事務局長の扇谷さんは、賞状と賞金を渡しなから、「賞状に押す印鑑がまだ出てないので、後日、ホースネックのマキノ・イサオさんに電話して、押してもらってください」と笑いながら言っていたから、少し真面目な語調で、一篇の中に同じ言葉が何度も繰り返される詩の不熟さを指摘した。私は生徒のように頷いて聴いていた。

一ヶ月ほど経ってホースネックに出掛けていった。扉を開けるとイサオさんが髭を撫でながら出てきて、「ああ、賞状の印鑑ね。できてるよ。」と、カウンターに賞状を広げ、大きな印鑑と朱肉を並べ、新聞紙に何度も試し押しを繰り返して、賞状に捺印を終えた。「第一回横浜詩人会賞がやっと出来上がったね」と、丸い大きな顔を崩した。私は本当の賞状を受け取り、筒に入れた。

横浜詩人会創立前・あと

それは、懇親会から始まった

植木肖太郎

昭和二十九年ごろ、横浜の関内、まだ駅はないが、ホースネックという画廊喫茶、「酒場」があった。マスターは牧野勲さんという。ここには、東京横浜の文学芸術家などが、いつも集まっていた。そこに、近藤東・扇谷義男・山田今次、寛慎二・ななどが集まる。みんな一杯三十円、ホースネックを飲みながら、熱く詩を語っていた。たくさん飲む人の援助者は「篠原あや」さん。詩人の中の唯一の女性である。

ある日、近藤さんが「詩人の会を作りたいな。懇親会でいいんだ。あやさん、事務を頼むよ」ぼくは、この言葉から、横浜詩人会ができたことを知っている。当時、東京にも詩人の中心になる会はなかったはずだ。「詩人連邦？」だが、「凍」「海市」「掌」など、横浜には多くの若い詩人の同人誌があったが、ホースネックに集まっていた詩人たちが中心で、川崎にも、泉沢浩志などがいたが、呼びかけなかったようだ。

長島三芳・寛さんがいたので、

「横須賀」は、仲間だということにしたような気がする。ぼくなどは、高校生から連なり、大学に入った頃で、いつの間にか存在したが、ただ「同人誌を発行」していたから創立の仲間に入れてくれた「いわば養成工」のようなものだ。あやさんと共に、椅子ならべや、雑用仕事の掛だ。

小奈さんの勤務先の「野沢屋百貨店」での写真展では、絵葉書をつくり、お金のない会が、よくやったものだ。のちに詩人会賞を設けたが、篠原あやさんの「懐」をあてにできた。2、3回目頃までは、詩人会賞の受賞者は、在籍会員を回って挨拶に來られた。勤務先の高校に、「石原武」「今辻和則」さんが来てくれて恐縮した。詩人会賞受賞者のその後の活躍をみれば、間違いもなく良い賞で、近藤東、篠原あやさんらの功績は大である。木原孝一さんと知り合えたのも、会のお陰であった。ただ、荒地や列島の詩人たちは出入りしてなかった気がする。平林敏彦や、当時もう故人の若くして逝ってしまった詩人の人見勇「襤褸聖母詩集」などのことはいつも話題になっていた。



脱皮を終えて

禿慶子

サロンの雰囲気で一九五八年に一三名で結成された横浜詩人会は、一〇年後に私が入会したときも話したい人と話し合うという気楽な集まりだった。当時の会員は多分、五〇名弱だったと思うが、女性には篠原あやさん、片田芳子さんの三名。半年後に中野妙子さんが入会したが、いずれにしても、新人の淋しさを味わうことはなかった。

入会の年に横浜詩人会賞が設定された。詩人会通信の一〇〇号記念特集の「横浜詩人会賞要項」によれば、目的は神奈川県下の現代詩運動の推進を計る。主催は横浜詩人会。後援は神奈川県新聞社。受賞の条件は神奈川県在住の新人。原則として一名。賞金五万円とある。なお賞金は、ある会員個人の拠出だった。

第一回受賞は、石原武氏の詩集『軍港』。  
創立二四年後の一九七二年、

突然、近藤東会長及び理事が総辞職した。

間もなく、旧理事を除く主だった人たち二〇名位が集って、新しい新人会についての検討会が発足し、何回か議論を重ねた。資料はなく、参加した私の記憶なので全員の名前を挙げられないが、井出、山田、長島、川口、中島、松村、寛、片田さんたちが活発に発言し、主に中島さんが纏め役だったと思う。今迄「清規」というものがあつたが、新しく「規約」の設定。

詩人会賞は、賞金は会員の一口千円以上の拠出金を基金とし、神奈川県新聞社からの援助をいただいた。更に対象詩集に会員のアンケートを取り入れた。役員名については、出席者のほぼ全員が理事に違和感を持っていたので議論の末、委員に決めた。こうして、現在の詩人会の原形ができた。

詳細は解らないが、一四年間同じ形では会が淀み、その間に時代も変わり、何より会が成長した証と、私は考えている。

海外詩人との交流会のことなど

保高一夫

私が二〇代後半で横浜詩人会に入会した頃は、今のようには百三十名を超すような大世帯な組織ではなく、三、四十名の小さな会であった。

会合に出ると、最初に「私が一番若い保高です」と、挨拶したものだ。その後、油本達夫さんや荒船健次さんが参加することによってそれも叶わなくなった。

長島三芳さん、山田今次さん等から勧められて入会したのだが、当時のメンバーは酒豪揃いで、二次会、三次会とよく飲み歩いた。牧野さんの経営する「ホースネック」や樹木希林の紳士酒場「叶家」が多かったが、近藤東さん、篠原あやさん、寛慎二さんが常連で、ワイワイ騒いで飲んだが、不思議と詩の話はしなかったように思う。

近藤東さんは、「詩人会は交流、親睦を図る場であつて、詩を学ぶのは個人でやれば良い」と

言っていたが、横浜詩人会創立の意思であつたのかも知れない。私が事務局を担当したのは一九八七年から八八年にかけての二年間だが、川口敏男会長時代だったが、国際都市横浜として、海外詩人との交流をぜひ実現したいと思つた。

東西奔走したが、勝手が分からず困っていたが、経験のある金子秀夫さんに手助けしていただき、中島可一朗さんを団長として、台湾詩人との交流会を行うことができた。

この海外詩人との交流事業は、第二回を今辻和典さんを中心に中国と行い以後継続していく予定であつたが、諸処の事情で中断されてしまい、残念でならない。

もう一つ懐かしくて思う出来事として一九九九年、水橋晋さんが会長時代に泉区の文化施設のオープニングセレモニーに参加し、舞台上で詩の寸劇をしたことが、特に印象に残っている。

## 福島県大熊町の梨

荒船 健次

福島県大熊町に住んでいた一  
つ年上の従兄は、農業高校を卒  
業後、就農、父親の後を継いで  
梨園を経営していた。二〇一  
一年三月一日の東日本大震災、  
追い打ちを掛けるように、東京  
電力福島第一原子力発電所の事  
故によって、大熊町すべての  
町民が避難を余儀なくされた。  
彼も家を追われ、梨農園を放棄  
せざるを得なかった。帰還の見  
通しが立たず空しく四年目が経  
過、彼は苦渋の決断の末、須賀  
川の新居で新しい生活を始めた。  
震災後、私は直ちに従兄一家  
の安否を気遣い、彼に連絡を試  
みたが、電話はつながらなかつ  
た。手紙を出し、あきらめずに  
連絡を繰り返しているうちに、  
数週間後ようやく避難先の彼か  
ら連絡があり安堵したものの、  
彼は言葉を詰まらせ涙ながらに  
震災後の避難の様子を語った。  
その過酷極まる避難の様子を聞  
くことがどれほど辛かったこと

か、慰めの言葉も浮かばず、胸  
の張り裂ける思いで一家の避難  
行の話を、じっと聞いている  
ことしかできなかった。

原発事故直後、従兄一家は着  
の身着のまま、しかも寝たきり  
の叔母を抱え、小学校体育館に  
避難、厳寒の数日を過ごし、交  
通渋滞を押して、息子夫婦の住  
む須賀川のマンションにたどり  
着き、一先ずそこに落ち着いた。  
それから近くのアパートを探  
し、仮寓の生活を四年間続け  
た。大熊町は帰宅困難区域に指  
定され、自宅に簡単に戻れない。  
戻る場合は一回毎に、一時立ち  
入りの申請をして許可を取り、  
立ち入る際は防護服着用しな  
ければならない。自宅は、震災  
当時のグチャグチャのまま。帰  
還がかなったとしても住める状  
態ではない。四年経っても放  
射能汚染の除去は遅々として進  
まず、梨園は荒れに荒れ果てて  
いる。生活再建の目は立たな  
い。古希を過ぎた彼は大熊に帰  
還することをあきらめ、須賀  
川に家を建て、新たな暮らしを

始めたのだった。

従兄から新刊本「残しておき  
たい 大熊のはなし」が送られ  
てきた。表紙は草紅葉が広がる  
野原（原発事故前は耕作地）そ  
の向こうに立ち入りが禁止され  
ている家屋、さらにその奥に村  
の来歴を見守ってきた青い山々  
が連なる。大熊町には震災前か  
らおおくまふるさと塾があり、  
塾は「古代米部会、歴史・民話  
部会、自然・木の実部会」の三  
部部会で活動がされていた。塾  
生は四〇名、従兄はその塾の顧  
問をしている。震災前から大  
熊町は、後世に残せるものを残  
しておきたいといった塾生一人  
ひとりの思いが強かったが、震  
災と原発事故後、塾生たちは  
会合を持つうちに、本を発行す  
る機運が高まり、従兄が、その  
思いを聞き纏めたものである。  
本は今後大熊町が福島県内の  
除染によって生じた汚染物質の  
中間貯蔵施設の建設や放射能が  
高い区域のため、故郷に帰れな  
い可能性と行く末が見えない悲  
観的な状況を踏まえ、地域に息づ

く民話や慣習、清流の熊川や自然  
の素晴らしさに恵まれた大熊の町  
を次の世代に残し、伝えていこう  
という熱い願いが凝縮されている。  
毎年秋に従兄の梨園から梨が  
送られてきた。幸水、豊水、新  
高など、瑞々しき、シャリシャ  
リ感、高い香りを堪能したこと  
が忘れられない。

大熊の梨がこの地域に植えら  
れ、長い試行錯誤と粘り強い品  
種改良の過程を経て美味しい梨  
が誕生するに至ったいきさつ  
が、史実に基づき①②まぼろし  
のうめえ梨で紹介されている。  
その冒頭を引用する。

ふるさとの大熊さは、うめえ  
なしがあつたのをしってか。  
一度食つたら、わすれらんにか。  
ほどうめえがたつた。

その梨のこと、忘れてもらいたく  
ねえが、わがってる範囲で書いて  
残して置きてんと思つてな。大震災  
から四年も経ちましたげんちよも  
書いて置くがんない。

これを書いている最中、奇し  
くも熊本地区中心に大地震が発  
生した。

理事長より

□6月4日(日)第4回理事会 野毛地区センター 15時〜①現代詩セミナーについて。進行の確認。役割分担など。②横浜詩人会賞の選考委員について。③詩画展について。20日4時半からオープニングパーティ。④「夏のさかりの朗読会」の準備について。⑤神奈川新聞の連載執筆者の推薦、確認。⑥詩人会通信の編集内容、進行など。⑦会計から報告。

□6月11日現代詩セミナー。別掲のとおり。

□画廊「楽」主催詩画展「猫」6月20日〜。同日、画廊において、開会記念のパーティが開催された。詩人約20名、画家15名ほどの参加。様々な「猫」がスペース全体にゆったりと潜んでいる、面白い詩画展となった。

\*

恒例の行事が粛々と進んでいる。近く創立六十周年を迎える

横浜詩人会だが、会員の高齢化により、現在、目の前の行事の準備に追われ、往時の会の熱気を懐かしむゆとりなど、なかなか持てない昨今である。会の歴史をこの時点で振り返って、ゆとりじっくり、会の歩みを確認しなければ、と思うことしきりである。会員諸氏のお知恵を是非、拝借したいと思う。

(油本記)

会員募集中!

横浜詩人会に入会ご希望の方・ご紹介の方はご連絡を。  
詳細は油本達夫理事長または方喰担当理事まで。  
〒220-0054 横浜市西区境之谷 30-19  
電話 045 (516) 3182  
メールアドレス : t.a.\_beat@kni.biglobe.ne.jp  
ホームページで入会申込書をダウンロードができます。  
<http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/>

通信担当から

【横浜詩人会通信では

情報をお待ちしています】

会員消息にて詩書、詩誌、イベント等活動の紹介を致します。掲載希望の方は、掲載希望と記して情報を油本理事長または担当・光富までお寄せください。郵便、メール等にて承ります。もし掲載漏れや遅延等あれば、再度ご連絡ください。

【通信(会報)をホームページで閲覧できます】

横浜詩人会通信の内容をホームページで pdf 版にて閲覧できます。  
<http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/tsusin.html>

個人情報問題がありますので、事務局と発行者以外の会員の住所や電話番号などは伏せますが、ほぼ会報を印刷所で刷るそのままの状態で見ることが出来ます。今後はホームページでも会報をお楽しみください。

【神奈川新聞掲載の詩について】

ホームページでの「港の詩」の掲載は完了しました。今年から、新たにHPでは「手紙」の連載を始めました。(新聞上では「装う」です)

中上哲夫さん、禿慶子さん、平林敏彦さん、水野るり子さん、細野豊さん、大石規子さんの作品掲載しています。以後、順次更新されています。お楽しみください。

【横浜詩人会賞の対象詩集について】

今年も横浜詩人会賞の選考の日が近づきました。

前年6月1日から本年5月31日までに発行され、そのことが奥付に記載された新人の詩集が対象となります。神奈川県内及び会員の第5詩集までが選考となります。

対象の詩集の情報を事務局から郵送されたアンケート葉書及び、事務局・詩人会のHPのメールアドレス等に連絡ください。

(光富)

会員消息 順不同・敬称略

【詩書】

関中子詩集『三月の扉』（思潮社）  
伊藤悠子『まだ空はじゅうぶん明るいの』（思潮社）  
田村雅之詩集『確氷』（砂子屋書房）  
禿慶子詩集『しゃぼん玉の時間』（砂子屋書房）

【会員編集・発行の誌】

「構図」創刊号  
編集発行 藤森重紀  
「伏流水」54号  
編集発行 うめだけんさく  
「狼」28号 編集発行 光富郁整  
「象」117号 発行 篠原あや  
編集 いわたとしこ 三上透  
「青い階段」109号  
編集 森口祥子  
発行 浅野章子  
「地下水」219号  
編集発行 保高一夫  
「索通信」21号  
編集発行 坂井信夫  
「アル」53号 発行 西村富枝  
「コールサック」86号  
発行 佐相憲一  
「構図」2号 編集発行・藤森重紀  
「Down Beat」8号 発行者代表 柴田千晶

【詩作品発表の誌】

「小樽詩話会」590号 下川敬明  
「いのちの籠」32号 佐相憲一  
佐川亜紀 渡辺みえこ  
梅津弘子 奥津さちよ  
「狼」28号 佐相憲一 鈴木正枝  
梅津弘子 日野零 小桜ゆみこ  
「山脈」15号 三上透 今泉協子  
桜井ささえ 宗美津子  
「交野が原」80号 平林敏彦  
佐川亜紀 金井雄一  
「嶺」44号 福井すみ代  
大鹿理恵 服部剛 坂井信夫  
「象」117号 うめだけんさく  
植木肖太郎 保高一夫 佐藤裕  
「青い階段」109号 荒船健次  
坂多瑩子 福井すみ代  
廣野弘子 石川敦  
「るなりあ」36号 荻悦子  
鈴木正枝  
「墓地」88号 荒船健次  
Web誌「浜風文庫」に月に一回のペースで詩を発表 長田典子  
「ERA」第三次6号（通巻26号）  
田村雅之 細野豊 方喰あい子  
今泉協子  
「地下水」219号 関中子  
うめだけんさく 石原妙子  
林柚椎 鎮西貴信 方喰あい子  
新沢まや

「タルタ」37号 田中裕子

「竜骨」100号 小林妙子

奥津さちよ

「滴」41号 新沢まや 菅野真砂

「詩と思想」6月号 馬場晴世

鎮西貴信 菅野真砂 山本聖子

絹川早苗

「Down Beat」8号 今鹿仙

徳広康代 中島悦子

【転居】

◎大谷良太

◎飛松裕太

◎水野るり子

◎浅野言朗

【メールアドレス変更】

◎石原武

（2016年8月以降も有効）

◎広瀬弓

【編集後記】

横浜詩人会は1958年に設立した。あと2年ほどで創立60周年を迎える。

今号は石原さん、植木さん、禿さん、保高さんに入会当時の話を書いていただいた。創設時やその当時の様子が興味深い。（光富）

【お願い】

\*会費、横浜詩人会基金等の振込みはこちらの口座にお願いします。

\*郵便振替

00230-0-5574

ヨコハマシンカイ

いつもご賛意・ご協力、感謝致します。

詩人会創立 1958年10月25日  
通信創刊 1961年2月10日  
会員数 129名（7月7日）